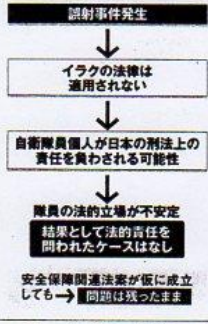


# 誤射裁かれるのは隊員

2003年から09年の自衛隊のイラク派遣で、隊員たちは危険を顧みずの活動を繰り返したにもかかわらず、誤って人を殺傷してしまったときなどの法的な立場は不安定だ。参院で審議中の安全保障関連法案でも、その状況は残ったまま。また隊員らはストレスを抱え、心理的にも不安定な状況に置かれていた。

**現場から考える**  
安全保障法制  
イラク派遣

イラク派遣時、仮に自衛隊が誤って人を傷つけてしまっていたら...



武器弾薬をめぐり、イラクで人を殺傷してしまったり派遣された隊員などが、場合、隊員個人が法的責任を負ったのは、誤を問われる可能性がある。

北海道の駐在地であった派遣前の講習会、こんなやりとりが交わされた。隊員「国の仕事なのに、なぜ個人が裁かれる受けなきゃならんのですか」幹部「日本の制度では、個人が刑法で裁かれる仕組みになっている。隊員「上司の指示で撃つ場合でもですか」幹部「上官の命令があっ

たとしても、状況次第は個人の責任を免れないかもしれない」と指摘した。隊員たちの間から「そんなおかしいことまで止めなきゃ」という声もあがり、イラク派遣の際、自衛隊は多国間軍に参加する中で、イラク国内法が適用されなかったことになった。だが、誤射であっても、正防衛などと判定されなければ、日本の法律で刑事責任が問われかねない。イラク派遣では幸い、そうした事態は起きなかったが、隊員の立場の不安定さは、安全保障関連法でも議論になっている。

「心」に傷「高まるリスク」

隊員の不安定さは、心理面にも及んでいた。陸自衛隊の内部文書「イラク復興支援行動史」には「心」の傷も問題になっていた。

隊員が「クルアーン」として、クウェートのホテルなどで2日間、休業をとっていた。行動史には、理由として「現場での過酷なストレス環境のみならず、

しつかり埋めないと大きな問題が起きてからでは遅い」と指摘した。これに対し、中谷元・防衛相は「相手を的確に識別して誤射使用をしないよう、事前に厳しい教育訓練を行う」と答へた。

隊員の不安定さは、心理面にも及んでいた。陸自衛隊の内部文書「イラク復興支援行動史」には「心」の傷も問題になっていた。

隊員が「クルアーン」として、クウェートのホテルなどで2日間、休業をとっていた。行動史には、理由として「現場での過酷なストレス環境のみならず、

別委員会で中谷元・防衛相は「過酷な環境での活動が想定され、精神的な負担は大きい」と考えられる。PTSDを含む精神的な問題が生じる可能性がある」と認めている。

また、隊員の心の支えは「幅広い国民の合意」と認す自衛隊幹部は多い。行動史の最後のページにある「支え」は「国民・国民の心の支えこそが我々隊員のための根拠」としてつけ加え、まとめをす「と締めくくった。

安全保障法は、各種世論調査で反対が強い。自衛隊幹部は話す。「お前たちから国民の合意を得た法律として入れたい。国民に理解を促さなければ法律で動機に行かされるのはたまりない」(田原「二階堂、三原の

一般の現地住民に危害を加える事態は想定しにくい」と答弁したが、隊員の法的立場の議論は深まらなかった。伊勢崎賢治東京外大教授は、参考人として出席した衆院特別委でこう指摘した。「何が起っても最終的に国家が全責任を取るといふ法の整備をして、我々は自衛隊を海外に送り出しているか、していないかと思う。これなしに、命を賭ける大義は生まれない」

隊員が「クルアーン」として、クウェートのホテルなどで2日間、休業をとっていた。行動史には、理由として「現場での過酷なストレス環境のみならず、

安全保障法は、各種世論調査で反対が強い。自衛隊幹部は話す。「お前たちから国民の合意を得た法律として入れたい。国民に理解を促さなければ法律で動機に行かされるのはたまりない」(田原「二階堂、三原の